

■建部綾足(凌岱) 文人画家。兄嫁と密通して、名門武家追放も、溢れる才能を拡散し続けた、“近世畸人”中の畸人。

たけべあやたり(りょうたい)

1719=

江戸で、(津軽)弘前藩家老喜多村政方の次男に生まれる。

本名久域。喜多村家は、代々藩主に重用されてきた名門で、祖父政広は、4代藩主津軽信政の寵臣で、若くして家老に昇進、山鹿素行に師事し、素行の娘を妻とするほどであった。祖父が死去した直後に誕生した父政方も、「津軽一統志」の編纂に着手するなど、学問で藩政に貢献し、母は衛(もり)子も、山鹿流兵学者の大道寺友山の娘という環境のなか、津軽の実家で、早くから、文武両道の教育を受けて育ち、

1725= 6歳 藩主津軽信寿から、弘前城内での歌舞伎見物を命じられ、8歳年上の兄久通に従って、公務を果たす。

1727= 8歳 父政方に連れられて、村内を巡見。

徂徠没 1728= 9歳 この頃、奥羽地方を行脚していた洗耳の俳譜に接するか。

梅岩心学始 1729=10歳 父が死去して、兄久通が家督を相続。

1730=11歳 兄久通が森岡そねと結婚。

享保大飢饉 1732=13歳 兄が江戸詰となる間、

1733=14歳 母も、祖母の看病のため、妹を連れて江戸に出た間に、兄嫁そねと密通し、

江戸から戻ってきた兄に露見して、

1737=18歳 二人して、大病に罹り寝込んでしまった後、

1738=19歳 そねは離縁され、自らは弘前を出奔する。藩の公式記録に逐電(脱藩)したと記され、重罪で、家老級の武士としては考えられない事件であった。兄が、喜多村家を守るべく、出奔と届け出たことで、その後、故郷には帰れないものの、罪を問われずに生きて行くことができることになる。

ワ船出没始 1739=20歳 身を寄せていた秋田の豪農で儒学者伊藤東涯の門人宮野尹賢の家を出て上京、宮野のついでで東涯の弟伊藤才蔵のもとに寄寓するも、学問に精進することなく、俳譜にのめり込み、俳書出版で著名な井筒屋庄兵衛の紹介で、大坂に芭蕉門下の志大野坡を訪ねて、「葛鼠」の号で連句の座に加わると、その場で、野坡から「風雅の逸物」と評されるが、秋田の宮野邸に戻って、蔵書を読み漁り、近くの禅寺で仏書にも親しんだ後、

1740=21歳 そねが死去。野坡の死を知る。俳譜修行で諸国を巡るため、関所を通過できる僧形になるべく、出家し、

1741=22歳 江戸に出て、駒込吉祥寺や青梅の常福寺で修業後、

公事方御定書 1742=23歳 秩父の禅寺正眼寺の説教僧になると、早速、秩父観世音の縁起と案内を記す本の著作を依頼され、

1743=24歳 三十三番札所菊水寺に庵を結んで、小鹿野の山田百梅はじめ、近在の俳人と交友。芭蕉五十同忌の法要を営み、紫格とともに、菊塚を建碑。

梅岩没 1744=25歳 秩父の俳友の勧めで、西国行脚し、京に向かう。円宗の僧名で、観音霊場巡りの成果である大著「秩父縁起靈験円通伝」を、浅草の辻本五兵衛から刊行、

徳川吉宗隠居 1745=26歳 続いて、その携行版「秩父順礼独案内」を刊行、以後、同書肆から、次々と著作を出版することで、正式に入門したり、立机することなく、俳諧師としての地位を確立していき、のちの、絵師としての活動も支えることになる。京で、彭城百川と出会い意気投合、俳諧とともに、絵画についても影響を受けることになる。それまでにも、人間関係の拗れから、問題多かつたが、伊勢派に転向して、野坡門の高弟風之と決裂し、百川の勧めで、金沢の希因に師事して、俳号を都因と改めるも、

菅原伝授十 1746=27歳 「俳譜 杖の先」を撰して、希因と齟齬をきたし、

義経千本桜 1747=28歳 希因から絶交状が届くなど、各派の師クラスとも、すぐに衝突。百川と吉野に桜を見る旅に出た際、秩父の旧友百梅から、彼の姪の奉公先の偶然から、生き別れた母と妹からの手紙が届けられ、江戸に帰って再会を果たすとともに、百梅の計らいで、浅草金龍山下に吸露庵を結び(第一次吸露庵)、俳号を涼袋と改め、いよいよ独立、秩父を行脚し門弟を集めるなか、恩人百梅が死去。

忠臣蔵 1748=29歳 兄久通が死去。百梅の一周忌に秩父小鹿野を訪ねる。

1749=30歳 妹が死去。理解してくれる母の強い希望で還俗すると、百川の影響で、画業を志し、秩父の門人たちに資金調達を依頼して、江戸の絵師の先駆けとして、長崎修行に向かい、桑名より百川と同行、京に滞在し、

1750=31歳 希因が死去。大和を巡った後、大坂を出帆して長崎に着くと、徳川吉宗の命で清から来て日本の絵師に衝撃を与えた沈南蘋の弟子唐通詞の熊斐や唐絵目利の石崎元徳らに、色鮮やかで写実的な花鳥画を学んで、

徳川吉宗没 1751=32歳 大坂に帰ると、画業で生計を立てようとするが、眼を病み、ほとんど失明状態になり、

1752=33歳 母の意向で、江戸に下り、冠子・無岸らの助力で、再び、庵を結ぶ(第二次吸露庵)。もう一人の恩人百川も死去してしまうが、眼病の治療を受けて、やや回復すると、

薩摩藩工事 1753=34歳 母の勧めで、中津藩主奥平昌敦に出仕し、

山脇東洋解剖 1754=35歳 藩主の命という形で、前回学び損なった山水画を学ぶべく、長崎を再訪、

自然真菅道 1755=36歳 清国の絵師で、山水画の名手費溥源に師事して、最新の様子を吸収し、独自の画風を確立。

1756=37歳 江戸に帰着し、中津藩主に奉仕。数か月、病んだ後、冠子の世話で、庵を結ぶ(第三次吸露庵)。

源内物産会 1757=38歳 眼病は治らず、致仕を願うも許されず、汐留の藩邸内で療養する間、深川の遊女で、深い教養を持つ才女紫苑と結婚すると、活気が漲るようになって、以後毎年、「春興帖」を刊行し、俳書も続々と出版、江戸を代表する書肆須原屋や京都の井筒屋など、時流に敏感な版元と組んでおり、

宝暦事件 1758=39歳 奥平昌敦が死去したため、藩邸を出て深川に仮住まい、以後、紫苑と、時には門弟も連れて、各地を行脚して、土地の俳人、画人と交友し、高崎では、紫苑が挿絵を描き、母が序文を寄せた絵俳書「あやにしき」を編纂。優れた門人が集まり、熱烈に支持されて、まさに、俳諧の宗匠になる一方、

大式政治批判 1759=40歳 神田弁慶橋近くの新居に移る。樗良との交遊がはじまり、青梅の俳人が多数来庵。

大岡忠光没 1760=41歳 掛取魚彦が門人になる。

1762=43歳 高弟鳥朴が離反するなど、人間関係の拗れは相変わらずであるが、のちに、「解体新書」など革新的な本を次々上梓する、須原屋本家から暖簾分けした市兵衛の最初の刊行物として、「画業の成果を4年がかりでまとめた「寒葉斎画譜」を刊行したのも束の間、

1763=44歳 男子が誕生。行脚を続けるなか、古代歌謡の片歌に開眼、古文復興に傾き、賀茂真淵に入門、自ら講義できるほど国学を極めるも、真淵とは決裂。“綾足”の号を用いて、片歌説を提起し唱道に努めていくが、

加賀千代句集 1764=45歳 橘町の新居に移る。

蘭金銀錦絵始 1765=46歳 芭蕉の神格化、俳譜ブームのなか、我が道を貫いて、著名俳人らからの批判が続出、

忠臣蔵大当り 1766=47歳 愛児の夭折したショックもあってか、京都に移住、冷泉家入門し、片歌を認められ、

明和事件 1767=48歳 加藤枝直を訪問し、上田秋成に会う。この間、養子思明(総丸)を迎えている。

久留米藩工事 1768=49歳 京都三条堀川東へ入町に住み、国学・片歌を講じ始める。実際に起きた事件に、自らの若き日の密通を重ねて、短期間に書き上げた「西山物語」を上梓。この年の「平安人物志」の画家の部、

1769=50歳 大坂の木村菜菔堂を訪れて、明清の名蹟を臨写するなど、研鑽を怠らず、松前藩主松前道広との縁から、蠣崎波響に絵の手ほどきするなど、「古今諸家人物志」の唐画花鳥部に名を連ね、絵師としても認められ、

1770=51歳 妻(紫苑改め)伎都とともに、伊勢能褒野を訪れ、倭建命顕彰の片歌碑を建立し、その「記念集」には、妻、母はもとより、中津藩主奥平昌庵、松前藩主松前道広も歌を寄せ、花山院常雅からは、「片歌道主」の称号を与えられて、ますます片歌に精進、

御蔭参流行 1771=52歳 下京衣柳押小路下ル東側辺に住む。10年ぶりに、画譜「李用雲竹集」を刊行、

田沼意次老中 1772=53歳 続いて、画譜「孟喬和漢雜画」を刊行し、

大原騒動 1773=54歳 魚介を生き生きと描いた傑作「海鏡図」を含む「建氏画苑」が版刻される一方、曲亭馬琴から評価され批判もされた、壮大なスケールかつ荒唐無稽な「本朝水滸伝」の前編を著す(後編は未完に終わる)など、物語、紀行文などにも有り余る才能を発揮したが、京から江戸に戻って、上毛を旅行中、桐生で病床につき、

解体新書 1774=55歳 熊谷の医師三浦氏宅に移って、療養後、江戸に戻ってまもなく、没した。出自と20歳以前のことは一切語らず、故郷に一度も帰ることは無かった。16年後に、著名な伴蒿蹊「近世畸人伝」が出版され、その8年後に出版された、三熊花頼著で、伴蒿蹊補の「続・近世畸人伝」に取り上げられ、「生涯酔っているのか醒めているのか計り知れない」と評される。

板橋区立美術館「建部凌岱展 その生涯、酔たるか醒たるか」